

# ことばを学ぶ メカニズム

## 認知科学からのアプローチ

今井むつみ  
Imai Mutsumi

### 第2回

## 色の名前がわかるとは どういうことか

### ❖「赤」は赤いのか？——「色」の意味領域

今回はことばを使うことができるためには、「点」としてではなく、「面」としてことばの意味を理解していなければならないということを述べた。今回は色の名前を題材にことばの意味とは何か、母語話者のように単語を的確に使うためには何を知らなければならないかという問題をさらに深めていきたい。

私たちは、「赤」「青」「黄色」「緑」などの色を指すことばが「抽象的な意味を持つ」とは思わないだろう。色は「自由」や「権利」などの抽象概念と違い、目に見えるし、複雑な概念でもないように思われる。それにもかかわらず、子どもは色の名前を覚えるのが苦手である。積み木遊びをしていて、「赤い積み木をちょうだい」と言っても白いのを渡してくることはよくある。

色がわからないわけではない。1歳前の乳児でも、色の区別はできる。しかし、青い車と赤い車、ピンクのチューリップとオレンジのバラの色が違うということがわかると青、赤、ピンク、オレンジということばの意味がわかったことになるだろうか。子どもは、色の区別ができるにもかかわらず、なぜ色の名前を正しく使えないのだろうか。

色は光の連続スペクトルであり、私たちの目には電磁波のうち380 nm-780 nmの波長の範囲で様々な色彩が連続して映っている。色は色相、彩度（あざやかさ）、明度（あかるさ）という3つの属性で物理的に数値として表すことができる。私たちの目は何万もの「物理的に違う色」を識別で

きる。トマトの色、消防車の色、イチゴの色はそれぞれ物理的には異なる色であり、それぞれの違いは乳児にもわかる。言語はそれらの「違う色」をごく少数のカテゴリーに分節して名前をつけ、「同じ」とみなしているのだ。つまり、「赤」ということばは特定のモノの色、つまりスペクトルの中の点を指すわけではなく、連続スペクトルの中の特定の範囲を指すのである。

トマトの色、イチゴの色、消防車のように赤いモノをたくさん覚えるというのは単に赤の「点」を集めたに過ぎない。「赤」の意味を使えるようになるためには赤の範囲、つまり「面」を知らなければならないのだ。

「赤」を面として理解するためには「赤」と隣り合う色である「紫」「ピンク」「オレンジ」ということばを知り、それぞれのことばとの境界がどこにあるのかを知らなければならない。しかし、「ピンク」の意味を知るためには「赤」「紫」「白」を知らなければならない。要するに、ひとつの単語の意味はその単語を取り巻く他の単語とどのように関係し、どのように違い、どこに境界があるかを知る必要があるということだ。これは大人が外国語を学ぶときでも同じである。

### ❖母語と外国語の意味領域の違い

母語と外国語の意味領域が同じように切り分けられていて、母語の単語と外国語の単語が同じ範囲できれいに対応するのなら、外国語を学習する時には単に母語に対応する単語を外国語の単語に置き換えればよい。つまり、音をすげ替えればよ

いだけの話である。しかし、実際にはそうはいかない。前回、「着る」や「持つ」に関係する動詞群を例にして述べたように、異なる言語は世界を異なる仕方で分節するからだ。

世界の言語の中には色の名前が2つしかない言語もある。大多数の言語は色名が4つから7つの間であるが、日本語や英語のように11も色の基礎名がある言語は少数派なのである。

日本語と英語の色名の数はだいたい同じで、ほぼ一対一対応が可能で色の語彙を持つようにみえる。しかし日本語と英語の間でも、詳しく調べてみると、日本語と英語のそれぞれの色の名前の範囲は実はぴったりと同じというわけではないことがわかる。英語で書かれた小説を読んでいるとよく“orange cat”という言い方がでてくる。しかし、それは私たちの思い浮かべる鮮やかなオレンジ色を指しているわけではなく、すこし赤みがかかった薄茶色を指している。つまり、英語の“orange”と“brown”、日本語の「オレンジ色」と「茶色」の境界は大きく異なっていて、日本語で「明るい茶」や「ベージュ」の範疇に入る色が英語では“brown”ではなく“orange”の範疇に入るのだ。

「青」と“blue”の範囲も同じではない。そもそも日本語には「みずいろ」という言葉があり、ほとんどの人は薄い青を「みずいろ」という。英語では「みずいろ」に相当する語はないので、薄い青も“blue”の範疇に入る。また、「青」も“blue”も隣接する色の範囲に拡張して使われることがよくあるが、拡張の方向が日英で違う。信号の色を日本語では青というが、同じ色なのに、英語では“green”という。未熟なトマトは日本語では「青いトマト」だが、英語では“green tomatoes”で“blue tomatoes”とは言わない。「青」は「青い山脈」「青い芝生」などのように緑の方向へよく拡張される。

私が以前飼っていた猫は「ロシアン・ブルー」という種類だった。灰色なのになぜ「ブルー」なのか不思議だったが、英語の“blue”は灰色の方向への拡張が目立つとどこかで読んでなるほど思った。

### ❖ことばの意味を区切る「点」と「面」

子どもが母語を学習するときには、自分が所属する言語コミュニティで、世界をどのように単語で分割しているか、単語と単語の間の境界がどのように線引きされているかを学び、語彙のシステムをつくり上げることが課題となる。

大人が外国語を習得する際の課題は子どもとは根本的に異なる。人は無意識にそれぞれの母語のことばでの区切り方が唯一無二で、もっとも自然な世界の分割の仕方だと思っている。母語と外国語で概念領域の分割の仕方が違っても、一見対応する単語があると——つまり「面」のどこかの「点」で2つの言語の単語の間に重なりがあると——その外国語の語が「面」全体として母語の語の意味と重なる、と考えてしまいがちなのである。大人が外国語の語彙を学習するとき、母語習得の際のようにゼロからある概念分野の語彙システムをつくっていくことはできない。大人は母語のフィルターを通して世界を覗いているから、たとえ母語を使わずに外国語を学習しようとしても、母語の学習のときに体に染みついた世界の区切り方を白紙に戻すことはできないのである。

\*

今回は「母語のフィルターを通して世界を覗いている」ということについてもう少し詳しく述べていきたいと思う。母語の概念の区切り方は無意識での認識のしかたに影響を与えているのだろうか。また、私たちが日常で無意識に行っている知覚、記憶、推論が言語にどの程度縛られているのだろうか。今回はこの問題を考えていくつもりである。  
(慶應義塾大学教授)

### ◆参考文献

今井むつみ (2010) 『ことばと思考』岩波新書  
今井むつみ (2013) 『ことばの発達を解く』ちくまプリマー新書